

大拙先生の墨蹟

古田紹欽

一

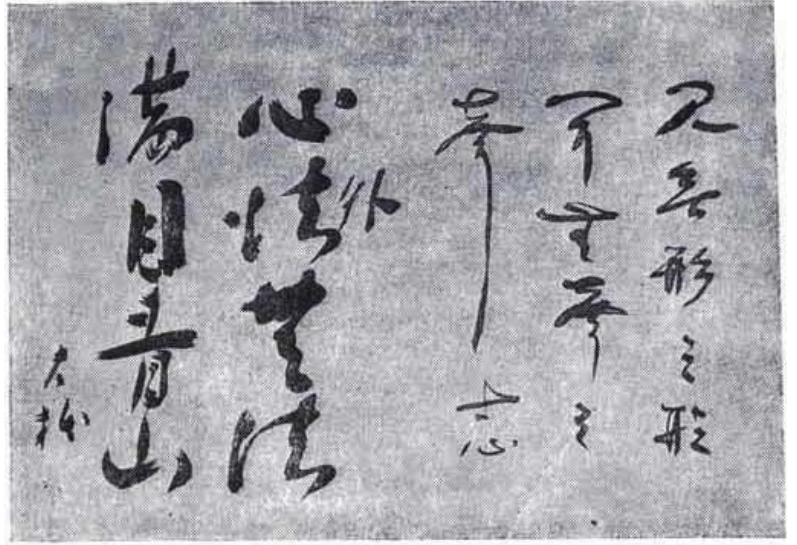
書蹟と墨蹟とは同じ意味ながら、いつとはなしに禅者の書を墨蹟と呼び、文人や学者、書家などの書を書蹟と呼ぶ慣しが生じ、概して区別して呼ぶようになった。これには理由がないわけではない。禅者の書には、一般的にいつて出来のいい悪いは別として、ある種の風格があり、いわゆる書蹟の書とは区別されるものがある。これは一口にいえば、筆者が出家者であるか在家者であるかの相違に基づこう。もっとも出家者といっても内実は在家者と殆んど変わることがなく、出家者風の在家者といった人たちもないではないが、それにしても、とにかく禅者と名のつく人の書には、一見して何かの特徴が見られる。特に世俗を超越した高德の老禅者となると、この特徴が一層はつきりと見られる。このことは書よりは画を例にとつたらよりはつきりしよう。禅画の画は画としてはまずいにしても禅者の画としての特徴は著しく目につく。一休の画などそれである。禅者の書の特徴は儒者の書などと比較すると殊にそれがはつきりとわかる。試みに江戸時代の儒者の書と同時代の禅者の書とをならべて見ると、まことにその相違が明瞭である。江戸時代頃の禅者の書になると、鎌倉室町時代の禅者の書に較べて、随分俗臭を帯び、その上概して下手な書が多いが、それでもそ

れなりに俗臭はあっても、儒者の書にないもの、違ったものがそこに知られる。

さてこうしたことを考えるにつけ、大拙先生の書には大いに注目すべきものがある。大拙先生は禅者といっても居士の禅学者であり、いわゆる禅坊さんではないが、それだからといってその書は学者の書ではない。大拙先生は口ぐせのように自分は学者ではないと仰言ったが、そうした意味で学者の書ではないというのではなく、ただの学者では持ち得ないもの——それは青年時代から参禅を重ねられた禅体験に外ならないが、それが微妙に書に見られる。禅者にも禅臭のいや味がないわけではなく、その書にもそれが鼻もちならぬものが往々あるが、流石に大拙先生のそれにはない。「身心脱落、脱落身心」の身心は心塵が原意らしいが、身塵にせよ心塵にせよ、大拙先生はその塵を装って隠そうとしなかった人であり、それが書にそのまま出ている。そうしてそれが身心脱落、脱落身心を思わす書となっているから不思議である。

「身心脱落、脱落身心」は見せかけとすると実にいやらしいものであり、もともと見せかけで脱落ということになるわけではない。禅者の書もこの見せかけがあったら、いうまでもなく禅者の書の名に値しない。能筆家は、書家は勿論ながら学者、儒者のなかにも数多いが、世俗の煩いが生活にとかく結びついていることから身塵、心塵がどうしてもまつわりがちで、その塵が書から離れない。学者が学問にかけてはすぐれ、その学問のもつ厳しき、鋭さが筆致の上に知られるのは当然ながら、そこには前述した書蹟と墨蹟との違いがあることは避けられない。大拙先生が自分は学者ではないといわれていることが、先生自身の口をかりるまでもなくその書が如実にそれを物語っている。

禅者の誰もが脱落的なものを身に体しているとはいわないが、書家の書はともかくとして世間の学者の書にしても、どうしてもぬけ切れぬ世俗性があり、その知的なひらめきも、ともするとその世俗性に結びつき、加えてその書が上手な場合、それが一種のみえになり易い。大拙先生の心友であった西田寸心(幾多郎)先生の書をここに引き合いに出すのはどうかと思うが、寸心先生は書が巧みであっただけに、その自信の程



西田幾多郎、鈴木大拙合筆

松ヶ岡文庫蔵

見無形之形

聞無声之声

寸心

心法(外)無法

満目青山

大拙

があらわに書に出ている。近代の哲学者の書としては、寸心先生の書に及ぶものはまずなかるうが、その書
があまりにも達筆だけに、整いすぎていて脱落したものがそこにはない。構えがあり過ぎるように思える。こ
のことは同じ禅者でも鎌倉室町時代の五山の詩僧の書に同様のことが指摘される。五山の詩僧の書には確か
に上手なものがあるが、その上手さが整いすぎている。五山の詩僧とて五山の大利に住持した程の禅者であ
った筈だが、それが学問に秀でたことによって、その秀でたものが書に勝ち過ぎていく。詩文がどんなにう
まく、筆達者であり、そのうまさ、達者さが見られるにしても、禅者として持たなくてはならないものを欠
いたとしたら、禅者の書にはならない。

寸心先生は勿論、ただの哲学者ではなかった。その哲学の根底には参禅修行の体験があったことは確かであるが、しかし禅者ではなかった。また自身もそうであろうという意志はなかったに違いない。従ってそこに

禪者として持つべきものをその書に欠いたとして当たり前であり、これにとにかくいう筋はなく、先生の書はつまり墨蹟としてではなく書蹟として見るべきではなからうか。

ところで大拙先生の書は寸心先生の書に較べるに、もし巧拙を言うならば紛うかたなくまずい。寸心先生は書にひそかに自負するものがあり、それだけに書法についても一方ならぬ関心があり、法帖について習われもし、書家としても一家をなす腕前があったと言えよう。もともとって生まれた才能があり好きこそものの上手なれで、書を好んで練習もされたことが、この人の書を益々巧者にもしたのである。寸心先生の参禪の体験は成る程浅からぬものがあつたにしても、それが書の場合はその才能と練習とがそれに勝って、それを覆い、学者としての知的なひらめきの方が強く現れる結果になつた。

それに対して大拙先生の書はどうかというと、その書は決して上手ではないが、禅体験がそのままに無造作に出ていて、いわば木地のままであり、漆塗りのはげというものがない。

大拙先生が禅を学問として歴史的思想的に究明し、禅思想史の体系化に努力された点ではやはり学者であつたことは事実であるが、禅体験そのものがそのまま学問になつていたところに、どうしても単なる学者と異なるものがあり、それがこの人の書に自然と現れ出ている。墨蹟が墨蹟であるための不可欠の条件は、いつにこの禅体験のそのままの現れにあり、もし禅者にしてその体験を欠くことがあつたとしたら、もとより禅者は禅者ではないが、その書がそれをそのままに現すものがなかつたらただの書でしかなく、時には書以下のものでしかない。この点、書蹟と墨蹟の違いを安易に區別して規定してはならない。

このことは例えば禅者の書がすぐれ、儒者の書が劣っていると、大拙先生に寸心先生の書を対比してとやかくいうのではなく、區別すべきは區別して見なくてはならぬということである。

大拙先生の書を見て痛感することは、禪者としての気骨と孤高とがそのままそれに出ていることである。

その書には禪者としてのそれが知られる。寸心先生は厳しい人柄であったと聞くが、大拙先生にもそれがなかったわけはなく、世間の人情でははかられないような厳しさがやはりあり、それが書のどこかに露呈している。書家の書によく見られるような媚態など聊かもなく、孤高に徹したものがああり、それがそのままに憚ることなく自然に出ている。とかく書に自信がある人に限って書に媚態があり、能筆家はそうした傾向に墮することが多い。大拙先生の学問は先生がどんなに自らが学者であることを否定されたとしても、結果として大拙禅学ともいべきものの樹立を見たのであり、これから先、禅学を志すものは必らず一度は通過しなくてはならぬその関門となったが、その禅学は決して順調なコースを辿って成立したものではない。先生の伝を知らればわかるように、学問の脇道ばかり歩んで漸く大成した人であり、学者になるべき途を経て学者となった人ではない。大拙先生の学問には苦学の跡があり、それが気骨につながっているように窺われる。その書に出ている強靱さは禅体験によることもさることながら、その苦労の気骨と無縁ではなからう。先生の学問は学道といった方が適切であり、学者は学者でも学道者であったのである。学道は身心で修めて学ぶことであり、大拙先生はそういう人であったわけである。それがまた書の上に必然的ににじみ出ている。一種の気骨をおびて出ている。黙々として学道に志したこの人の孤高さが出ている。

もっとも孤高といっても、その孤高は決して老いぼれた孤高ではなく、九十六歳まで生きて最後まで、がんとしたものを失わなかった孤高さである。しかも晩年の書に一層それが出ている。明治、大正、昭和の三代を生きぬいた孤高の禪者は、そう幾人もいないし、まして晩年まで活動し続けた人は何人もいない。まことに尊い存在であったと言わねばならない。ここで大拙先生の学問についてまでこれ以上言及する余裕はな

いが、晩年の書を見てもわかるように、なお不屈不撓なものが顕わに知られる。大拙先生はただ一筋に我が道を歩んだ人である。底意地が悪いと思われる程に何事も顧慮することなく、自分を貫き通した人であり、他におもねり媚びることをしなかった人である。そうしたことも書にまざまざと出ているような気がする。

世の学者の書には常識で判断の出来るものがあるが、大拙先生の書はそれがない。その書は巧いともまらずいとも言いようがなく、巧拙をもって判断のしようがない。

大拙先生はよく即非の論理をいわれたが、その論理は書でいえば、書にその論理のあとをのこさないところにその論理があろう。つまり書法の法をあとにのこしていない。それでいて全く法がないというのではない。禅者の書は中国では宋、元、我が国では鎌倉時代以後に数多く今日に遺っているが、名墨蹟と呼ばれるものは無法の書である。

書蹟とは何か、また墨蹟をどう見るかについては、書道史の上からすれば、意見もあり、批判もあり、見る人によって見方もまちまちとなるだろうが、ともあれ書蹟と墨蹟とを区別して見ないわけにはいかない。

ところで書家の書ならぬ墨蹟は禅者の余技ということになるだろうが、果たしてそうであろうか。書を技法として捉える限り、禅者の書は余技という外はないが、無法の書ということであればもともと技法はなく、余技はない。書家は禅者の書を評して往々に書法を踏まえないことから無法の書と非難するが、書法は大拙先生の即非の論理をもってすれば、その法は無法の法でこそなくてはならない。墨蹟は無法の法においてこそいわれるのであり、単に法に叶うことをねらうものではない。大拙先生の墨蹟は巧まずしてそれを捉えており、それは余技の書ではない。今、墨蹟論をここで述べるのが本旨ではないが、結論だけ言えば、書蹟は技法だけでは、それが本技であろうが、余技であろうが、墨蹟とはならない。書家は多くの禅者の書を我流の書といいかも知れないが、我流は別として、書蹟と区別して見なくてはならぬ墨蹟のあることは確かであり、先人が書蹟と墨蹟とを区別して呼んでいることにはその理のあることが肯かれる。大拙先生のような存

在は滅多に世に出るものでないことを思うと、その書はまことに尊い。先生がなくなつてはや満七年になる。先生の書を見て先生なるかなと末輩ながらつくづく感ずる。

終わりに、本書を編むについて、所蔵者の各位から協力を得たことを、ここに心から御礼申し上げる。

(昭和四十八年四月)